

コミュニケーション力を育む

—発信力に焦点を当てて—

英語科 熊上 絵里 石川 剛 津田 知春

1. 主題設定の理由

2020年の東京オリンピック開催を受けて、同年度より全中学校で、授業は原則英語で行うことを基本とすることが決定され、また府内の市町村単位でも2015年度より小学校1年生からの英語教育導入を決定する動きがあるなど（2014年2月7日朝日新聞）、近年英語科を取り巻く環境の変化には目覚ましいものがある。文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し（2013年12月13日）、中学校での目標を「身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図る能力を養う」と現行の学習指導要領の目標「コミュニケーション能力の基礎を養う」から一步踏み込んだ内容とした。今後、益々世界と対等に渡り合える国力増強のためのコミュニケーションのツールとして、英語教育が担う役割は大きい。

しかし現状は、インターネット、スマートフォンなどの普及により、媒体を通して安易に言葉をやり取りするといった傾向が見られ、媒体を通しては強気に、時には無責任に言葉を発する一方で、対面的な場面では主張をせず、発信力に乏しいという生徒が多々見られるという課題が存在する。「思いやり」という概念が大切な日本において、相手の気持ちを汲んで行動することを、ことあるごとに義務教育期間で推奨される子どもたちは、国際社会にでたときに、主張をしないと全く自分の意思を汲んでももらえないという事態に初めて遭遇することも少なくないのではないだろうか。

英語科における役割とは、英語力を高めることもさることながら、言語を学習する科目として、相手を認める・受け入れると同時に自らを発信・表現することの喜びを伝えることである。自尊感情を高め、発信することを恐れない生徒を育てるには、中学校だけでなく小学校から発表・意見交換の機会を多く持ち、自らを発信することを恐れない児童・生徒を系統的に育て上げる必要があると考え、本主題を設定した。

2. 英語科における「重なり・つながり・広がる」

小学校外国語活動では音声において外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化に対して体験的に学ぶと同時に、積極的にコミュニケーションを図る態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標としている。具体的には、“Hi, friends!”を活用し、ゲームやインタビュー活動などを通じて、食べ物や飲み物、色や形などを何と英語で表現するのか、慣れ親しんでいく。中学校にはそこに「書くこと」「読むこと」が加わり、小学校で慣れ親しんだ英語表現に具体的なルールがあることを学ぶ。英語を系統的に学び、その知識を用いてプレゼンテーションやスピーチなどの自己表現活動を行う。高校では小学校・中学校で培った4技能を更に伸ばし、英語力を高めていく。具体的には「読むこと」「書くこと」をより深め、読んだものを自分の言葉で言い換える・エッセイに意見をまとめ発表するなどより高次の表現活動につなげる。

小・中・高と成長を遂げる中で児童・生徒は幾度も同じような表現を学ぶ。例えばプリントがほしいとき、「プリントをください。」から“1 please.”→“Can I have one more

handout?”→ “Will you give me one more handout?”→ “Would you give me one more handout?”と変遷を遂げていき、同じような表現でも場面に応じて言い方が異なることを知る。

また扱うトピックも自分の身の回りの表現の仕方から始まって、学校、地域、国、世界、とミクロからマクロに小中高の10年間で大きな変遷を遂げる。そのようなことを知識として知るだけでなく、実際に考え、自分の意見を発信して通じる、という幾多の経験をすることで、児童・生徒は英語を「使える」ようになっていく。小学校段階からたくさんの「英語が使えた」という成功体験をすることで、英語で発信することを恐れない生徒が育つと考える。このことから英語科における「重なり・つながり・広がる」とは幼少期からたくさんの英語のシャワーを浴びせ、使う機会を間断なく与え、英語学習やコミュニケーションへの意欲を高め、自己発信ができる生徒を育てることだと考える。

3. 「発信力」を育てるために ―中学校英語科の役割―

小学校外国語活動での楽しさに重点をおいた英語の授業から、「読むこと」「書くこと」が加わる中学校英語では、「英語は覚えなければならない単語・文法が多くわからない」と英語嫌いに陥る生徒も少なくない。ベネッセ総合研究所

([www://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo))によると英語が嫌いだと答えた中学2年生は全体の約6割にもものぼる。また嫌いになった時期は中1の後半が26.6%と中学校1年生段階でつまづきを感じている生徒が多い。このことから、小学校では大好きだった英語が中学を卒業する頃には嫌いになり、そのまま高校に進学するという生徒が多いと考えられる。この現状を打開するために中学校英語科が担う役割は大きい。小中高合同研究の一年次である本年は目指す児童・生徒像を、英語という言語を通して「自分の言葉で、自分の意見を明確に相手に伝えられる児童・生徒」とした。自らを発信できる児童・生徒を育成するためには自分に自信を持たなければならない。中学校英語科では全学年においてペア・グループワークを多く取り入れ、互いを受け入れ、安心して自分の意見を発信できる雰囲気作りに努め、小さな成功体験を積み重ねることで自信をつけ、発信することを恐れない生徒を育成しようと試みている。

子どもたちの発信力を引き出すには

- ①適切な動機づけ、方向付けを行う。
- ②創意工夫が可能な幅を段階的に大きくする。
- ③全員が安心して取り組めるようにする。
- ④多様な課題に取り組ませる。
- ⑤物理的な環境を整えてやる。
- ⑥発表の機会を必ず与え、コメントを行う。

参照：樋口忠彦編著 「個性・創造性を引き出す英語授業」 研究出版 1995
が必要である。全学年において、スピーチ・スキット・プレゼンテーションの機会をとり、互いの作品を鑑賞し、フィードバックする時間をとると共に、ALTへのインタビューなど、実際に英語を使い、通じる楽しさ通じない悔しさを感じる時間を設定することを目指した。

以下に本年の実践事例を示す。

4. 本年度の実践報告

【3年】

I have a dream ～四技能を統合したスピーチの指導～

授業者 石川 剛

(1) 単元設定の理由

本単元では、キング牧師の物語を通して、人種差別といった人権問題やアメリカ公民権運動の歴史を扱っている。ポールが久美に1枚の写真を見せたことをきっかけに、久美はキング牧師についての本を読む。その内容についてクラスメイトに紹介し、次にキング牧師が抱いた夢についての英文を読むという構成になっている。本文では彼の実際の演説が引用されており、生徒はキング牧師のスピーチの意味を考えることになる。今回の学習指導要領の改訂で「(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」と新たに明記されており、スピーチのテーマについて自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えることが必要であると考えられている。そこで本単元では、キング牧師のスピーチを参考にし、生徒にとって関わりのある「附中をよりよい学校にするために」というテーマでスピーチすることを最終目標に設定した。スピーチに至るまでの活動としては、自分の考えや気持ちを文と文のつながりなどに注意して書く必要があり、それを正しく相手に伝えるためには正しい発音や強勢、イントネーションを身につけることが不可欠である。また実際の発表ではクラスメイトのスピーチを聞き、概要や要点を適切に聞き取らなければならない。さらに本単元では各クラスでのスピーチ発表の後、自分のスピーチ原稿にイラストを付け、展示することにした。そうすることで読む活動を通して他クラスのスピーチについても触れることができると考えた。このように本単元のスピーチ活動を通して、生徒は総合的に四つの技能を向上させることが可能である。さらに言葉によるコミュニケーションのみならず、表情やジェスチャーといった非言語の重要性についても学習することが可能であり、コミュニケーション能力を育成することに繋がると考えた。

(2) 単元目標

- 間違いを恐れず自らの考えを話す。
- 話し方や表情などを工夫しながら自分の考えを正確に伝えることができる。
- 教科書本文を読んで、人種差別について書かれている内容を読み取る。
- 現在分詞や過去分詞、また接触節の後置修飾を用いた文の構造を理解する。

(3) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①間違いを恐れず、積極的に自分の考えを話そうとしている。	①正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて、適切に音読することができる。 ②話し方や表情などを工夫しながら自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えることができる。	① 語句や表現、文法事項などの知識を活用して内容を正しく読み取ることができる。 ② 300 語程度の英語を聞いて、全体の概要や内容の要点を適切に聞き取ることができる。	① 現在分詞・過去分詞の後置修飾を用いた文の構造を理解している。 ② 接触節を用いた文の構造を理解している

(4) 単元の指導計画 (全9時間)

第一次 現在分詞、過去分詞、接触節を用いた文の文法項目を学習させる (2時間)

第二次 教科書本文を読み、理解させる (3時間)

第三次 “To make Fuchu better” のスピーチをさせる (4時間)

(5) 単元の実際

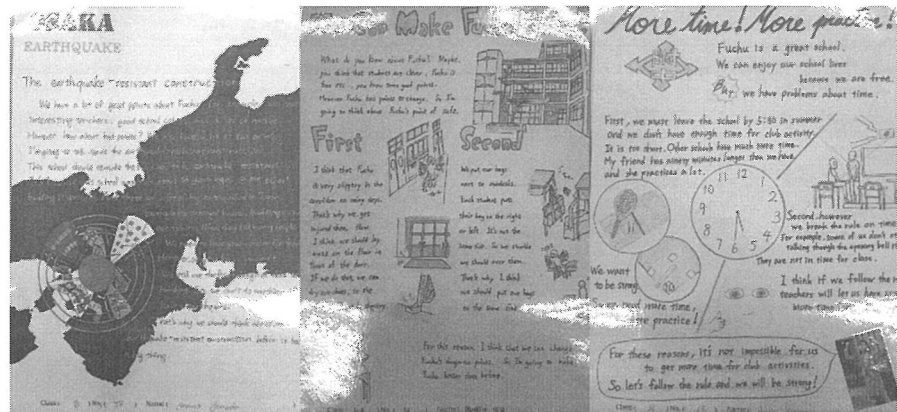
まず、導入の段階でキング牧師が1963年に行ったスピーチ映像を見せ、相手に訴えかける効果的なスピーチについて班で交流させた。その後、本単元におけるスピーチのテーマに関してマインドマップを用い、考えを整理する活動を設定した。生徒はこれまでに「わたしの好きなことば」や「日本文化」についての紹介する活動でも同様にマインドマップを使って考えを整理したことがあったため、容易に取り組むことができた。部活動や行事、学校安全など3年間の学校生活を通して感じた様々な意見があり、中学3年生としての強い思いも感じることもできた。その後自分の表現したい内容を文と文とのつながりや構成を考え、draftを書く作業に移った。イントロダクションでは、愛着のある学校だからこそ先に優れた点から述べ、その対比として改善点を述べるように指導した。ペアで文法や語彙など表現に関して相互に添削を行い、1st draftを提出させた。その後はペアやグループでの発表練習に移り、同時に教師との個別のやりとりを重ねた。発表後はそれぞれ自分のスピーチ原稿を読み手にとって魅力的なものにするためにイラストを付けた。

生徒の作品①

生徒の作品②

生徒の作品③

活動の様子



(5) 成果と課題

今日、中学校英語科に求められているのは、コミュニケーションの中で自らの考えを相手に伝えるための「発信力」を育成することである。生徒の発信力を向上させるためには、四技能の総合的な育成とコミュニケーションへの意欲を高めることが不可欠である。本単元においては、スピーチ本番までに原稿の推敲を重ね、何度もスピーチの練習を繰り返す中で、生徒の積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢や態度を見ることができた。もちろん生徒にとっては大変な作業だったが、この過程を通して理解が深まったに違いない。さらにペアやグループでの練習を繰り返した結果、自信を持って発表に望むことができ、やり遂げた後には達成感を感じることもできた。また他者のスピーチに対しても様々な意見や感想を持ち、主体的に取り組むことができた。

今年度は附属池田地区の研究テーマ「つながり・かさなり・ひろがる授業」に取り組んで1年目である。小学校と高等学校の間に位置する中学校としては、小学校に置ける外国語活動で育まれた素地の上に、四つの技能をバランスよく育成し、高等学校においてさらに総合的な英語力が高められるよう橋渡しする必要がある。小学校や高等学校とのつながりを意識し、系統的に「発信力」を高められるような指導法をさらに追求していきたい。

【1年】

Wheelchair Basketball を通じて ～発信力に焦点をあてて～

授業者 熊上 絵里

(1) 単元設定の理由

本単元は、車いすバスケットボールを題材としている。dialog 形式で進められてきた前単元までとちがい、単元として初めて読みの教材が加わり、生徒はある程度の長さのある文章の読み方を学ぶ。また、車いすバスケットボールという障がい者スポーツのルール説明を通して、can を用いた文を自然に学習できる単元でもある。外国語活動 “Hi, friends! 2 Lesson 3” で小学校6年時にすでに生徒は can について触れ、自分のできることやできないことについて述べ、またクラスメートにインタビューをするといった活動をしてきている。本単元では、can を用いた文を定着させると共に、生徒自身が「写真の人物になったつもりでインタビューを行う」活動を最終ゴールに設定した。この活動を設定することで、生徒は障害を持った人はどんなことを言うのだろう、と自分のこととしてインタビュー内容を考えるだろう。障がい者との共生について自然に考えられることが期待できる。また授業の終わりに、授業者が実際に中学3年生の車いすバスケットボールプレイヤーにインタビューしている様子のビデオを流す。自分たちと年の近い少女が障害を抱えながらも懸命にバスケットボールをする様子を見て、生徒は表面的に題材を捉えるのではなく、現実にあることとして、車いすバスケットとそれに携わる障がい者の思いを考えるはずである。今回の実践は文法とそれを用いた表現に終始するのではなく、content（内容）を意識して書く活動を行い、話す活動へとつなげるものである。また自分たちが創作したインタビューと実際のインタビューを見比べる中で、より深く障がいと障がい者スポーツについて考えられる Content を意識した実践となるように試みた。

(2) 単元の目標

- 教師や友人の話を興味を持って聞き、間違いを恐れず積極的に話す。
- can を用いた文で、自分や第三者の紹介やインタビューをする。
- 本文のあらすじや大切な部分を読み取る。
- can を用いた文の構造を理解する。

(3) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①まちがいを恐れず、積極的に話そうとしている。	①正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて、適切に音読することができる。	①障がい者スポーツについての本文を読み、あらすじや大切な部分を読み取ることができる。	①can を用いた文の構造を理解している。
	②自分や第三者の紹介やインタビューをすることができる。		

(4) 単元の指導計画

単元の指導計画（全8時間）

時数	ねらい	主な学習活動	評価規準				評価方法
			コ	表	理	言	
第1時	・本単元で身に着ける can を用いた文の構造を知り、理解する。	・ one minute chat & report ・ “I can~.” “I can’t~.”を用いた椅子取りゲーム	①			①	活動の観察
第2時	・ can の疑問文/否定文の構造を理解する。 ・ can を用いて有名人を紹介する。	・ one minute chat & report ・ can の疑問文・否定文の構造を理解する。 ・ 外国人に紹介したい日本の有名人について、紹介文を作成する。		②		①	活動の観察 ワークシートチェック
第3時	・ can を用いた文の構造を理解する。 ・ can を用いて有名人を紹介する。	・ can を用いた文のパターンプラクティス ・ 効果的な発表の仕方を練習する。	①	②		①	活動の観察 ワークシートチェック
第4時	・ can を用いて有名人を紹介する。 ・ 本文の内容を理解する。	・ 有名人紹介をクラスメートにする。 ・ Lesson 7 Part1.2.3 を通読し、あらすじをとらえる。 ・ 本文を適切に読む。		①	①		活動の観察
第5時	・ can を用いて有名人を紹介する。 ・ 本文の内容を理解する。	・ 有名人紹介をクラスメートにする。 ・ パート 1,2 を正しく読む。 ・ Part1,2 の間で起きるであろう会話をパートナーと考えて発表する。		①	①		活動の観察
第6時	・ can を用いて有名人を紹介する。 ・ 本文の内容を理解する。	・ 有名人紹介をクラスメートにする。 ・ Part 3 本文を京谷和幸選手に触れながら、適切に読む。		①	①		活動の観察
第7時	・ can を用いて有名人を紹介する。 ・ 本文の内容を理解する。 ・ 補助犬について知る。	・ 有名人紹介をクラスメートにする。 ・ Part 3 を適切に読む。 ・ リスニング問題で補助犬について知る。		①	①		活動の観察 ワークシートチェック
第8時 本時	・ can を用いて有名人を紹介する。 ・ 写真を用いて即興でインタビューを作る。	・ 有名人紹介をクラスメートにする。 ・ 障がい者スポーツ選手・盲導犬・介助犬の写真を用いて、ペアで即興でインタビューを作る。	①	②			活動の観察 ワークシートチェック

(5) 本時

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価規準・方法
Greeting	Greeting	本日の当番の生徒が挨拶を行う。	
帯学習 (10 min.)	<ul style="list-style-type: none"> ・今週の歌 “Top of the world” を歌う。 ・動詞ダンスを踊る。 ・ “Who is he/she” クイズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちよく歌う。 ・グループで協力して行う。 ・本日の当番の生徒2名が事前に作成した外国人を紹介したい日本の有名人を、前に出てクイズ形式で発表する。 	ア① 活動の観察
復習 (5 min.)	・Lesson7 をペアと一緒に音読する。	・内容に関する質問を行った後、車いすバスケットボール以外の障がい者スポーツについて何があるか考えさせる。	
導入 (5 min.)	本時の目標提示： 写真を見て、即興でインタビューを作る		
展開 (25 min.)	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアでインタビュー内容を考え、発表に向けて練習する。 ・3組が前に出て、写真を掲示しながら、作成したインタビュー内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・model を見せて、簡潔に説明する。 ・お互いにアイデアが出し合っているか、机間指導をして確認し、個別に指導する。 ・練習時間を事前に与え、自信を持って発表できるように準備させる。 	イ② 活動の観察 後日ワークシートチェック ア① 活動の観察
まとめ (10 min.)	・車いすバスケットボール選手から、附属中学生に向けてのメッセージビデオを見る。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちが作成したインタビュー内容と、実際のインタビュー内容を比べさせる。 ・自分たちが障がい者との共生についてできることを考えさせる。 	

・対話文を作っている様子

・ワークシート（アイデアを書き留めている）



STEP1 右の写真の人物になったつもりで、インタビューする人・される人に分かれて、インタビューの会話を作りましょう。アイデアはメモ程度で書くこと。

必ず最低！文は“can”を使った英文を用いること。

MEMO

例) name・job・When do you-?・Where do you-?・Do you like-?・Can you-?... など

name: Kazuya Sato
job: a

Yuto: Hello. My name is Yuto. Nice to meet you.

Yuri: Hello. My name is Kazuya Sato.

Yuri: Nice to meet you, too Yuto.

Yuto: What do you do?

Yuri: I'm athrite. I play track and field.

Yuto: Oh, athrite. Do you like run?

Yuri: Yes, I like it very much.

Yuto: Can you run fast?

Yuri: Yes, I can.

Yuto: What do you dream?

Yuri: My dream is world champion!

Yuto: Oh, good ruok!

Yuri: Thank you.

STEP 2

Practice for the presentation. eye contacts / gesture / smile

STEP 3 Presentation

STEP 4 Watch video

ビデオを見た感想

まわりより不利な点が多量で「頑張りすぎてすごいな」と思った。
むしろこちらが元気つけられるようなパワーがあった。
こっちが元気つけられる存在はありがたい。

5. 成果と課題

「つながり、かさなり、ひろがる授業」をテーマにおいて、12年間の知の構築をめざす取り組みの1年次である本年は、英語科における「知」を「相手の意図を理解し、その理解した内容を自分の言葉で表現することができる力」と設定し、その力の育成に向けて授業を行った。

最終目標をペア発表においたため、生徒は協力して発表内容を作り、生徒同士で内容を推敲し、そこに感情を肉付けし、ジェスチャーをつけ生きた内容に持っていくという活動が生徒間で自発的に行なわれた。このような活動を通じて、相手に正しく伝える努力と共に、わかりやすく伝えようとする態度、より正確に情報を理解しようとする態度が身に着くと期待できる。

英語科の授業では小・中・高ともに「尋ね合う」「話し合う」「発表する」「相談する」時間を積極的に設定し、お互いに高め合いながら英語の表現の仕方や工夫を学ぶ機会を作っている。だからこそ、小中、中高のつながりで同じ内容を異なる言い方で表現する、同じテーマをプレゼンテーションし、学年に応じて中身を色付けしていくなど、児童・生徒が何度もその表現に触れる機会を提供し、理解を深めることができるようになると考えられる。次年度以降はより小中高の「つながり・かさなり・ひろがり」を意識し、どのように「発信力」が形成されていくのかを追求していきたい。